平成 29 年度　地域福祉フォーラム

東京力×無限大

報告書

主催：

社会福祉法人
東京都社会福祉協議会

平成 29 年度地域福祉フォーラム実行委員会

東京都内社会福祉協議会職員連絡会

プログラム

日時：平成 30 年 3 月 4 日(日)13 時 00 分～17 時 00 分(受付開始：12 時 30 分)

会場：飯田橋レインボービル 2 階、7 階・家の光会館 1 階

時　間	内　容	会　場
12:30～13:00	受付	レインボービル 7 階 大会議室
13:00～13:10 （10 分）	開会 開会あいさつ	
13:10～14:10 （60 分）	**基調講演** 私たちで描く未来（ゆめ） ～住民・ボランティア・学校・施設等の実践を通して～ 市川　一宏さん （ルーテル学院大学大学院　学事顧問・教授）	
14:10～14:30 （20 分）	移動・休憩	
14:30～17:00 （150 分）	**分科会①** 「新たな仲間、お迎えマニュアル」 ～新たな仲間がほしい人のために！～	家の光会館 1 階 セミナールーム
	分科会② 多世代交流 ～子どもたちを地域で育んでいくために～	レインボービル 7 階 大会議室
	分科会③ 地域の“わ” ～バウムクーヘンの日に聞く“わ”の話～	レインボービル 2 階 A 会議室
	分科会④ 子ども食堂の可能性 ～探してみよう、子どもの居場所から生まれる地域の力～	レインボービル 2 階 中会議室

基調講演

私たちで描く未来（ゆめ）

～住民・ボランティア・学校・施設等の実践を通して～

■講師

ルーテル学院大学大学院
研究科長・学事顧問・教授

市川（いちかわ）　一宏（かずひろ）さん

専門は社会福祉制度政策・地域福祉・高齢者福祉。
現在、東京都共助社会検討委員会 座長等を務めながら全国各地の実践から、様々な「地域の福祉力」を学び、各地域に合った地域福祉実践を研究テーマとする。全国・都道府県・市区町村の行政、社協、民間団体における計画の策定、実施、評価および調査研究、人材養成・研修等に多数関わる。
近年、地域の福祉力を高め、孤立を防ぎ、「おめでとう」で始まり、「ありがとう」で終わる一人ひとりの人生が守られる、希望あるまちづくり、共生型社会づくりに挑戦している。

● 基調講演

講師　市川一宏　氏

この講演では、地域の生活課題と政策動向をもとに「何が求められているのか」を述べ、そして実際の活動を通して「何ができるか」「何をしたいか」述べたいと思います。

「1．地域の生活課題」
～人口減少と過疎高齢化～

生活困窮者支援について、孤立、貧困、不安定就労、虐待、ひきこもり等が複合化する複合的問題が顕在化している点に留意する必要がある。東京都の高齢者福祉計画でも明らかだったのは、今後増える老々介護、認知症の方が認知症の方をケアするといった認知介護、一人暮らし高齢者の問題である。多摩ニュータウン、練馬区の光が丘や板橋区の高島平など、集合住宅のかなりの部分が限界集落化している例もある。都市部においても社会的支援が必要となっている。

～孤立死や虐待等の問題～

生活困窮者が晩ご飯を食べられるように、地域の居場所をどう使うかというチャレンジが、民生委員、児童委員、町会、ボランティア等によって行われている例もある。今、地域住民の孤立・貧困が大きな課題になっている。

また、児童虐待に至るおそれのある要因として、乳児で養育負担が大きいこと、また保護者側の問題、孤立や貧困等の環境の問題が挙げられる。知的障害・慢性疾患、アルコール依存などによって、親族や身内、地域社会から孤立した保護者がおり、孤立化防止のための見守りが求められている。

孤立、経済不安の問題をどうとらえるか。「明日は我が身」の問題である。

～閉じこもりの原因～

① 身体的要因

外出したくても体力がない、といった虚弱によるもの。

対応策としては虚弱になってしまったならば、それ以上にならないよう、体操や園芸、畑仕事などの活動により、「予防」していくことが必要である。

② 心理的要因

外出して転ぶことが不安、買い物ができるか不安などといった様々な不安。また、することがない、したくない、といった理由。

対応策としては趣味や楽しみなどの「したい活動」の機会を提供することが必要。また、「できる活動」になるよう、支援が必要。

③ 社会環境的要因

一人暮らしであり孤立していたり、一人での外出が困難といった要因。これらに対しては社会資源の情報提供が必要である。

民生委員児童委員活動への参加は、他人のためだけではなく、地域を歩いたりすることから自分のためにもつながっている。これが地域活動の原点である。

様々な閉じこもりの要因に目を向け、ちょっとした居場所を作れるか。またボランティア活動とは、自らが地域活動等に参加することによって、精神的、肉体的能力低下を防ぐ意味も期待され、助け合い、一緒に歩む存在である。

「2．社会福祉の最近の動向　地域福祉実践」
～試される地域の福祉力
求められる地域社会の再生～

誕生して「おめでとう」と祝福され、
人生の最後にあって、支えてくれた人々に「あり

がとう」と言う。
「おめでとう」に始まり
「ありがとう」で終わる人生

誕生しての「おめでとう」とは、命を与えられておめでとう、すなわち、生まれた命に対して最大限に尊重するという意味である。だから子どもの命が親によって奪われてはいけない。

ケアをしてくれた家族や、地域で支えてくれた人に、自分が亡くなるときに「ありがとう」ということができたら、それは人生最後でもっともすばらしい行為。

自分が孤立していたら「ありがとう」を言うことが出来ない。いつも自然に「ありがとう」と言うことができる社会にするのが私の夢でもある。「それぞれが自分らしくいられる地域づくり」は自分の原点である。

「この子らに世の光を。
この子らを世の光に。(糸賀一雄)」

～共助社会づくりを進めるための検討会（東京都）～

検討会の『東京における共助社会づくりを進めるための取組みについて～お互い様の心を大切にした社会を～』提言では、共助社会を①互いの違いを尊重する社会、②相互理解に基づく社会、③協力し合って問題を解決していく社会、④明日への希望を実現する社会、⑤お互い様の心が根付いた社会であるとした。

人それぞれ、個性、能力、生き方、世代、国籍、文化、生活は違う。中でも日本人は固まりやすく、グループに所属するという気持ちが強い傾向にあるが、互いに多様性を尊重し合い、思いやりの気持ちをもって協力をしたい夢を描く。

違いがあること、違う文化を理解するには交流が必要。そのための出会いの場が必要である。

～人口減少社会における多世代交流・共生のまちづくりに関する研究会（全国市長会）～

多世代交流・共生のまちづくりの施策・実践の基本的視点は、第一に、「地域による子育て支援による虐待問題の発生予防、子育てサロン等による孤立予防」で、高齢者もそれに関わっていくべきとし、第二に「高齢者の閉じこもり・虚弱予防、認知症高齢者への支援、要介護者を支える家族への支援等に、地域の一員である子どもたちがケアに関わり、地域の福祉力を最大限活用して地域で困難に直面する方を支えること」、そして第三に「『成長過程にある子どもたちにとっても、一人の人間が、人生の各段階を生き抜き、老いていく姿を見て育つこと』であり、子どもたちの人間理解を深めるもの」であるとしている。

これらで述べられていることを地域の人がやっていくことが求められる。
高齢の方も、地域の一員である子ども達のケアにかかわる。高齢の方から教えてもらうことが、多世代交流になる。

～地域力強化検討会(厚生労働省)～

昨今話題となっている「8050 問題」とは、80 歳代の高齢者が 50 歳代のひきこもっていた子どもの面倒を見ており、親の亡き後に起こる生活困窮の問題である。高齢者自身も弱っている状態で、高齢福祉・障害福祉を分けることはできない。

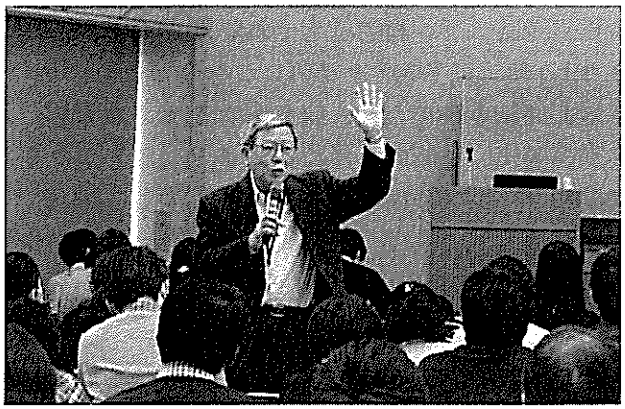
社会福祉法改正の 106 条の 3(包括的な支援体制の整備)は絶対逃してはいけない。

住民活動に丸投げせず、「協働」するには、行政はどういう活動をするのか、社協はどういう仕組みを作るか。「我が事、丸ごと」にするためには連携が必要で、それぞれが責任を果たさなければならない。

～生活困窮者自立支援制度の理念～

秋田県藤里町白神山地では、稼働年齢の 10 人に 1 人の方が引きこもりであったことが、調査でわかった。若い層の場合、仕事を続けられなかったり、何度も職をかえ、結局地元に戻ってきて、周囲の目を気にして引きこもってしまう場合が多い。

そうなると朝と晩が逆転し、地域での自立が難しくなる。そのため、相互に支え合う地域を構築することが必要。



（参加者への投げかけ）

市川：そういう場合、みなさんはどう対応しますか。

参加者：まずは訪問する。来てくれない方が、体調不良で来れないのか、何かわだかまりがあるのかなど、気持ち的なものがあるから来れないのか。

参加者：解決のためにお礼を差し上げた。1 時間の庭掃除・雪下ろしなどをしてくれたら 300 円くらい。
その人は今まで収入がなかったが、収入ができたことで外に出るようになった。（引きこもりから抜け出す大きなきっかけとなった）

市川：良い事例をご紹介下さり、感謝します。私は、来てもらうと思わないで、どうしたら来たい気持ちになってもらうかが大切だと思います。
「靴に足を合わせるのではなく、足に靴を合わせる」に通じます。地域にその人が合わせるのではなく、その人に地域が歩み寄るのです。

～社会的養護とは～

子育てを親だけの責任にするのではなく、「地域で」子育てを支援する。また、子どもたちだけではなく、親も孤立させないこと。

子どもたちが生活できる場所の提供や地域における養育支援が必要。

～子どもの貧困～

子ども食堂の取組みについて、宮崎県では、参加する子どもたちを、特定（貧困）の子どもたちに限定するのではなく、直面する問題がわからなように、“みんな”を呼ぶ。東京ではどのように取り組むかが課題。

「3．接ぎ木実践の必要性」

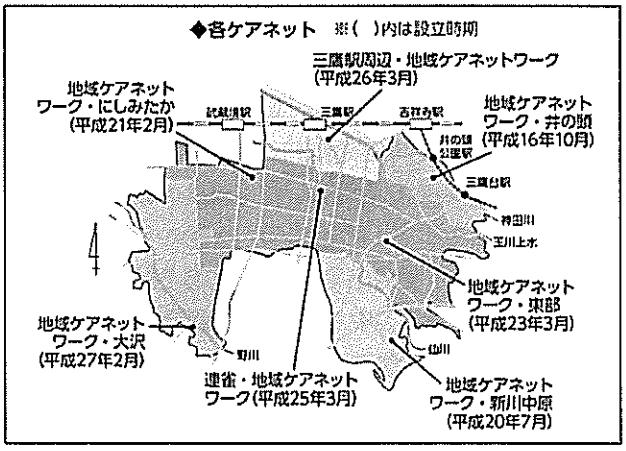
地域の「強み」は活用し、「弱み」は改善していく。地域を見て（診断して）特徴づけることが必要である。

問題解決に取り組むための資源「人」「もの」「金」「とき」「知らせ」をどう活用するか。例えば地域の「施設」をどう活用するか。

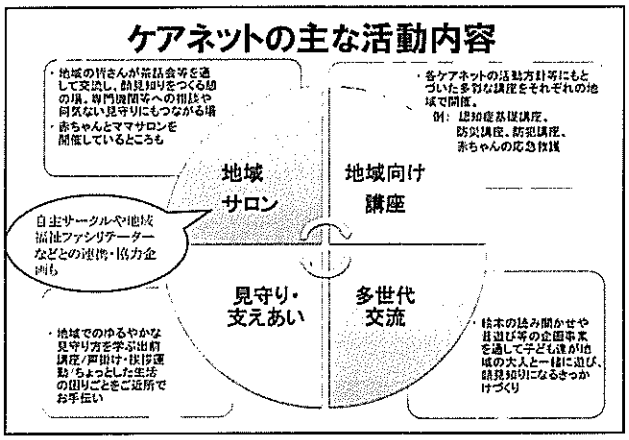
また、どう連携するか。「地域福祉パワーアップカレッジねりま（練馬区）」などは、地域でさまざまな活動を担うたくさんの実践者を輩出している。そういう財産をどう活用するか。

～地域ケアネットワーク(東京都三鷹市)～

三鷹には 7 つのケアネットワークがある。



7 つのケアネットはそれぞれ個性があり、違う形である。これを他の地域に持っていっても使えない。ケアネットワークの主な活動内容は以下の通り。



(地域サロン／地域向け講座／多世代交流／見守り・支え合い)

皆で協働できることはないかを皆で模索し、「～『共に生きる』地域づくり～」では、住民参加の「新たな支えあい」の仕組みづくりが目指された。

また「地域包括支援センター」は、規模と人材が十分だとは言えない。介護予防、虐待予防等々の多様な役割をすべて実施し、さらに地域づくりを丸投げされるとつぶれてしまう。地域福祉活動の基盤があり、地域のつながりがあるところでは地域包括支援センターはやっていけるが、それがない場合は期待される役割を遂行することは困難だろう。

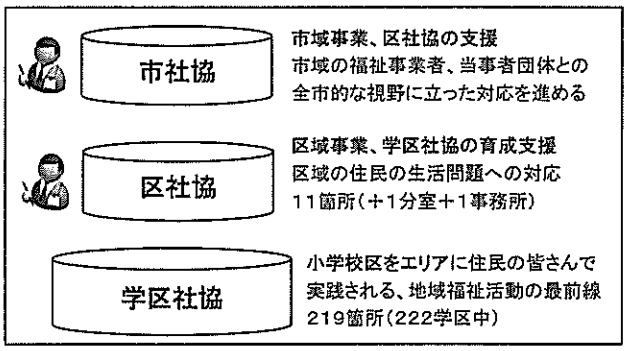
～世代を超えた寄り合い所～

NPO法人「地域の寄り合い所また明日」(東京都小金井市)には「保育園」と認知症の高齢者が通う「デイホーム」があり、さらには「地域の寄り合い所」も兼ねている。ここには小学生が下校後に遊びに来るだけでなく、子どもも一人の「人」として認知症の高齢者と関わる機会になっている。

～京都市内の社会福祉協議会の活動～

京都市社協の特徴は、図のように、小学校区を単位とする学区社協の基盤とした活動を推進していること。

・見守り活動(定期的な声掛け・お誕生日訪問等)
・居場所づくり(住民交流サロン・子育てサロン等)
・相談活動(住民からの心配ごと・困りごと等)
・健康すこやか学級(住民主体の介護予防　214学区)
・地域あんしん支援員設置事業の推進　狭間や支援拒否の方への寄り添い支援



市川：なお、以上お伝えしてきた実践を、各地で行うことは決して容易ではありません。先にも述べましたように、それぞれの地域には、それぞれ特性があり、歴史がある。「何が求められているか」「何ができるか」「何をしたいか」という3つの視点をもち、皆で考え、実践することが大切です。

～生活の動線に合わせるということ～

例えば、日本国籍を有しない人であれば、母国のご飯を食べるために集まる場所をつくったり、ベビーカーを押している人たちであれば、雨の日に子供が濡れない駐車場をもったデパートを活動の場所として使ったり。その人の視点、動線に合わせることが大切。

「理解する」を英語に訳すと understand と言う。すなわち上から見ていては、理解できない。アンダーに立たなければ、議論は成り立たない。相手の視点に合わせることが重要である。

愛知県一宮市の「のわみ相談所」では労働相談などを行っている。よく言う「ホームレス」は、家がない人のことを言うのではなく、居場所がない人のことであり、そういう人たちに対して、「住職衣」を基本として支援している。

その人に居場所はあるのか。全国で「縁側活動」、まさに地域に縁側(その人がいられる場所)を作

る活動が広がっている。

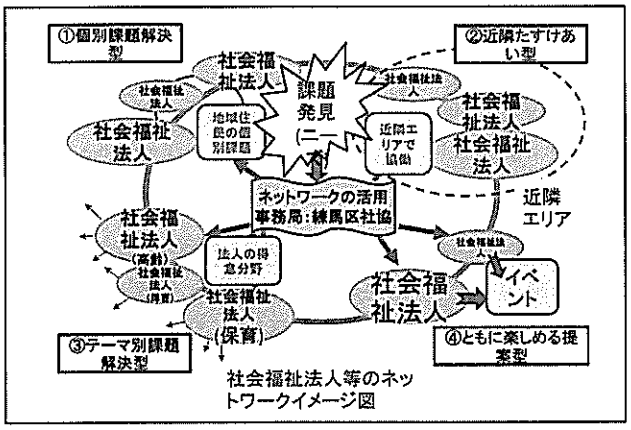
「4．私たち自身も変わらなくては」
～一人の住民として～

まずは思い立ったらやってみるということ。1文で自分の言いたい（やりたい）ことを考えておく。自分ができることをショートメッセージにして伝えられるようにする。理解してもらうことが「連携」するために必要。そのためにも、自分の役割を理解しておくこと。また関連する活動の実態を理解しておいて頂きたい。

～法人として～

社会福祉法人による地域における地域公益的な取組が広がっている。地域にある施設だけでは解決しない問題が多くある。住民との相互交流を図りたい。

練馬区社協が取り組んでいる活動は以下のようになっている。



（社会福祉法人等の社会貢献事業のネットワークづくり）

個別課題解決型、近隣助け合い型など、4つの提案を示し、地区それぞれでネットワークの取組みが始まっているが、当初は理解を得られなかった。

～生き方を学ぶ ＝ 福祉教育～

自分を知り、他者を知り、その違いを理解する「人間理解」。自分がやれることも、やるべきことでなければやらないという当たり前のことが社会の常識になっていない。

自分が言っていることでどれだけの人を傷つけているか解っていない。自分が言ったことでダメージを与えてしまうことに対する理解が必要。それらは、子どもたちが「出会い」によって知る。

自分を知り、他者を知り、互いの違いを知ること。それが「自己理解」。

また、地域で活動する方の後ろ姿で子どもたちに教える必要がある。地域にそういう場があるだろうか。

～連携の阻害要因を取り除く～

今、考えなければならない課題は、自由な人格をもった「市民」が行うボランティア活動と、町会や地域住民が主体である見守り活動、サロン活動との違いが不透明であること。それでいて、たとえば社会福祉協議会内で部署が分かれ、連携していないのなら、問題である。

地域の生活課題が多様化し、拡大している現在、孤立を防ごうとしている団体や個人が連携をせずに、孤立しているのは本末転倒。協働していかなくては地域支援は成り立たないのではないか。そのためにも連携による効果の再確認が必要。

また日ごろの問題意識はどうか。みんなが集まるテーブルがあるか。全社協の報告ではプラットホーム（みんなが集まる）、それぞれ活動に戻っていける場を作ることの必要性が示されている。

自分のことを振り返らずに、他人にものを言うことは簡単。社協・行政それぞれに弱み、強みがある。それをふまえ、議論することが必要だと思う。

～地域に根ざすキーパーソン～

キーパーソンとは、住民と、地域福祉コーディネーターの間に立つ人。地域福祉コーディネーターだけで一人ひとりの住民に働きかけることは不可能である。

まずは間に立つ人を見つける事。それが「ネットワーク」になる。ネットワーク作りがとても大事になる。

「地域の縁側づくり」

地域にはサロンが増えている。1990年末に提唱された「ふれあい・いきいきサロン」。「子育てサロン」や「介護者のサロン」など、全国的にサロン活動が増えた。「こども食堂」も地域のサロンだといえる。

様々なサロンを地域でどう作っていくか。形にこだわりすぎず、その地域や参加者にあった場を、地域で考えて、創ることが重要である。

また、サロンとはみんなで参加するもの。地域のサービス専門の連携、多様な保健医療福祉の専門家との協力を考えていくことが必要。また、地域住民によるボランティアの活動が大事だと思う。

運営について。高知市では、サロンを通して民生委員も含めみんなで、地域全体で子どもたちを支えている。それが共に生きていく社会を築くということ。

市川：実践するか、しないかという0か100ではなく、その間には、99通りの活動があり、それを加えて100通りの活動が成り立ちます。それを地域で考えていく過程と役割の合意、協働した取り組みが地域づくりで求められることではないかと思います。

子どもたちも担い手、お年寄りも担い手。みんなそれぞれやれることから始めてみませんか。

参加者数　176名

第２分科会

多世代交流

～子どもたちを地域で育んでいくために～

■講師

ルーテル学院大学大学院
研究科長・学事顧問・教授

市川（いちかわ）　一宏（かずひろ）さん

専門は社会福祉制度政策・地域福祉・高齢者福祉。
現在、東京都共助社会検討委員会 座長等を務めながら全国各地の実践から、様々な「地域の福祉力」を学び、各地域に合った地域福祉実践を研究テーマとする。全国・都道府県・市区町村の行政、社協、民間団体における計画の策定、実施、評価および調査研究、人材養成・研修等に多数関わる。
近年、地域の福祉力を高め、孤立を防ぎ、「おめでとう」で始まり、「ありがとう」で終わる一人ひとりの人生が守られる、希望あるまちづくり、共生型社会づくりに挑戦している。

■実践報告

立川市自治会連合会砂川支部長
立川市大山自治会相談役

佐藤（さとう）　良子（よしこ）さん

宮城県生まれ。1999 年から自身の住む、東京都立川市の大山団地で自治会会長として活躍。加入率 100 パーセント、孤独死ゼロを実現。「日本で１番住みたい団地」とまで言われ、青少年対策、高齢者対策などでユニークな取り組みを実践している。
2004 年　内閣府男女共同参画局「女性のチャレンジ賞」受賞
2011 年　地域活動功労者賞を東京都より受賞
全国各地で講演活動も行なっている。
著書に『命を守る東京都立川市の自治会』

東京都立練馬高等学校　教諭

正木（まさき）　成昭（なるあき）さん

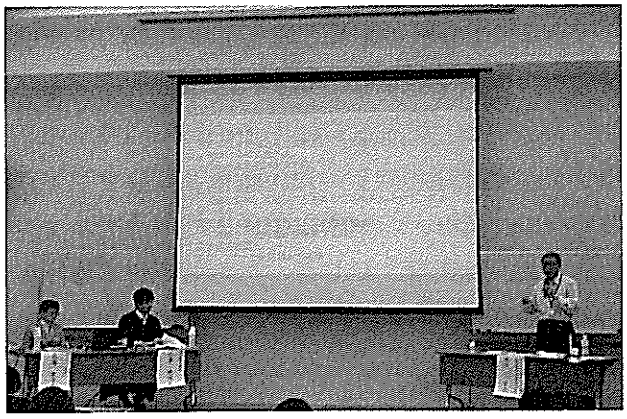
東京都立練馬高等学校 教諭/教員歴 17 年
ボランティア同好会顧問
東京都奉仕・ボランティア教育研究会事務局長
自身のボランティア経験を活かし、「地域と共にある学校」を目指し教育活動の中で「地域と連携するための働きかけ」を実践している！ボランティア同好会顧問としても「地域に根ざす活動」に主眼を置き活動中！
主な実践例：「スクールボランティアサミット」の運営
「練馬光が丘地域力活性化プロジェクト」との連携
「練馬区社会福祉協議会」との連携

分科会２
多世代交流
～子どもたちを地域で育んでいくために～

● ねらい

子どもたちが豊かに育つために、大人は何をしていけば良いのか、どのようなやり方があるのか、いろいろな世代が子どもたちを支えることができるのか、また世代間交流の意味は何か、自治会と教育現場での実践報告を通して考えていきたいと企画しました。

講師　市川一宏　氏



子どもたちは対象でなく主体です。子どもなりに自分の活動を目指していけると思います。それをバックアップしていけるような地域を、協働してつくっていくことが大切です。子どもたちには、目標に向けて一歩一歩進んでいってほしいと思います。それに寄り添っていく大人たちが必ずいます。

多世代交流は世代を超えて一緒に学んでいく姿だと思います。高齢者ケアに子どもたちも関わっていく、それは、子どもにとって老いを学ぶ良い機会です。そして子育て支援に高齢者も関わる、それが多世代交流です。

オリンピックでも、勝者はメダルを取った方だけではありません。それを目指した人もみな、勝者です。その経験から多くを学びます。また、メダルを取った人たちはみな、“支えられてきた”と言っています。挑戦する人たちを支える仕組みがあるわけです。

（被災地支援、地域包括ケアシステム、三鷹市子ども家庭支援ネットワーク、世田谷プレーパーク、福井県美浜市新庄小学校の課外活動、上越市のやすづか学園、笛吹市親子ボランティア抱っこ sase 隊、三鷹市のコミュニティ・スクールの実践が紹介されました。）

被災地支援活動で見えてきたことですが、“高齢者”、などと一括りにせずに、ＡさんＢさんという視点が大切です。個々の方々を協働して支援していく一つひとつの行動が、未来を切り開くと思います。

地域包括ケアシステムでは、高齢者自身も活動してください、ということがうたわれています。能力がありやる気のある高齢者も多いので、地域と関われる場を作り、活動や生活をバックアップしていく必要があります。それは高齢者の自己実現にもつながります。

子育て支援の分野には、支援センターはじめ既存のものが多数ありますが、あちこちにでき始めた子ども食堂を、今あるネットワークにどう結び付けていくのか、そこを議論する必要があります。

世田谷には、遊び場を軸にして、地域の世代間交流の場としているところ（プレーパーク）もあります。こういう場所づくりも重要です。

廃校を利用して、全国の学校に行っていない子どもたちに育つ場所を提供しているところ（やすづか学園）もあります。地域の住民が収穫祭に畑で採れた作物を学園に持ってきてくださる、また寮生活をする子どもを自宅に招いたりする、その支援によって子どもたちが育ち、戻っていきます。地域と子育て、学びの協働です。

中学生に赤ちゃんを抱っこさせて、そのぬくもりを知らせたいと、活動しているところもあります。やれるところからやり始めていました。

三鷹市のように、地域の人たちが集まって運営する、コミュニティ・スクールも最近増えてきて

います。

これらの取組みは、生き方を学ぶという福祉教育そのものです。それは、以下の３つの特徴を持ちます。

①人間理解

・自分を知り、他者を知り、その違いを理解する。「おめでとう」で始まる！

②自己理解＝生きていく力

・自分を信頼し、自分らしい縦軸の生き方を

・お互いの違いを理解しようとする優しさを

・困難に直面しても夢を失わないねばり強さを

・辛い時には立ち止まり、自分の力ではどうしようもない時に、誰かに救いを求める勇気を

③コミュニケーションを学ぶ

・聞く力

・話す力(プレゼンテーション力)

・相手に対応して説明する力

・互いを評価する力

● 実践報告

佐藤良子　氏

立川市大山自治会の取組み

15 年間自治会の会長として、まちづくりに取組み、その後、高齢者の見守り活動や支援の場づくり、たまり場づくりを行いました。具体的には、見守りネットワークをつくり、孤独死０となっています。各家のインターフォンは、すべて非常ベルに換え、サークルは 180 つくりました。高齢化率 30%、65 歳以上が 1,100 人、独居高齢者が 400 人、世帯数 1,600 戸の自治会です。自治会の役目は、行政にできない部分、今不足しているものをやることだと思います。学校は子どもたちが行きたくなるような学校にするのが仕事、家庭は楽しく会話ができるようにするのが仕事、地域は一生住み続けられる地域をつくるのが仕事です。

1　防災防犯

老人会や学校、幼稚園、社協など 17 団体と合同で、防災訓練を年２回行っています。クイズに答えながらまちの中を２キロ歩く、ウォークラリーを行ったり、避難所訓練として会場設営を２時間で行ったりしています。また東日本大震災時に中学生が活躍したことを聞き、中学校に働きかけて教育委員会を動かし、中学校９校全ヵ所で防災訓練の指導を始めました。３年になります。特に、中学３年生には、全員に救急救命講習を受けてもらっています。自立して何でも自治会でできるまちをつくるため、個人情報名簿をいただく代わりに、全ての世帯に保険をかけています。

2　子どもを支えるまちづくりの取組み

幼児虐待が起こったことをきっかけに、子どもを守るには親だけでなく、地域でのサポートが必要と考え、“ママさんサポートセンター”をつくり、子育て中の親の相談窓口としました。24 時間対応しています。また、夜中に街中で落書きをされたことから、中学校に出向き、生徒に美しいまちづくりを呼びかけました。落書きした中学生だけでなく、120 人の中学生が自主的に清掃してくれました。現在は、おじさんたちもラジオ体操後にゴミ拾いを行ってくれます。

“あいあいパトロール隊”は、腕章をつけて活動するので、不審者を寄せ付けず犯罪の抑止力になっています。他には、子どもたちへのあいさつ運動も行っています。青年リーダーは、小学５，６年生や中高生を対象として、ジュニアリーダーの育成のためにキャンプ指導を行ってくれます。

（市川）スーパーマンがいなかったとしても、チームならできます。実績があったことでなおさら、説得力があったのだと思います。

3　多世代交流

自治会には、ヒップホップや読み聞かせサークル、ひなたぼっこグループなどのサークルがあり、180 人のリーダーがいます。多くのリーダーがいることで、たくさんのイベントを行うことができます。空地には雑草が生い茂っていましたが、子どもたちへの犯罪防止のために草刈りをするの

で、その場所を駐車場として貸してほしいと行政に交渉しました。120 台駐車できますので路上駐車はありません。企業や刑務所の体育館や運動場、会議室のほか幼稚園など、どんな会場でも借りることができます。現在、25 人ほどの大学生が３つのお祭りに参加してくれますが、その際には高齢者夫婦の家にホームステイしています。ボランティアは現在 500 人を超え、それぞれのチームで活動しています。自治会では事務職員を雇っています。家のポストにチラシや新聞がたまっていると、隣近所から自治会に電話が入ります。また駆け込み寺のように、鍵をかけず、いつでも虐待などに対応できるようにしていますし、医療センターや産婦人科とも連携しています。

（市川）人と人との関係を大切にしてきたからこそ、このような活動ができたのだと思います。圧倒されるほどいろいろなさっていますが、必要だから行われているのであり、他の地域ではそれをどこがやるのか？行政は社協では何をすべきなのか？どう連携していくのか？参考にしてください。

● 実践報告

正木成昭　氏

子どもたちを地域で育む

市川先生の講演の中で「地域における子育て支援は地域の未来を築く取組みである」というのは本当にそうだなあと思いました。また「接ぎ木実践の必要性」をおっしゃっておりましたが、私が実践していることはこれなのではと考えています。「福祉教育」は、これからの子どもたちに必要な視点なのではないかと感じています。

1　授業による地域連携

東京都における独自の教科として“人間と社会”があります。平成 19 年度から始まった教科“奉仕”に道徳教育やキャリア教育を取り入れたものです。

その中に奉仕体験学習があるのですが、かつては清掃活動や花いっぱい運動を行いました。しかし、それではいろいろな人とのコミュニケーションは生まれないのです。地域のお祭りなどに参加することで、本物の学び、体験ができないかと考え、該当するお祭りの実行委員会の方とアポをとり、趣旨説明を行い“練馬まつり”や“光が丘よさこい祭り”“東北復興祭なかの”に参加させていただきました。授業の一環として行うので、イヤイヤ参加した生徒もいました。しかし、振り返りを行ったところ、変容が見られる生徒が多くいました。お祭りで誘導を担当した生徒は、「会場案内を行ったがうまくできず、パンフレットを持参すべきだった」とか、エコステーションでは、「ごみの分別をお願いしても大人が協力してくれなかった」「日頃からごみの分別を心がけるべきだと感じた」とか、給水の担当者は「何気なくやっていたが感謝されてやりがいを感じた」など、あらためて認められる喜びや、褒められる喜びを、感じることも多かったようです。

2　部活動における地域連携の例

“連携”ということをみなさんはどう考えますか？どのようなことが連携なのでしょうか。

本校のボランティア同好会には、現在１年生６人、２年生０人，３年生８人がいますが、３年生はもうすぐ卒業してしまいます。練馬高校ボランティア同好会は、地域に密着してやっていこうという趣旨のもと活動しています。昨年は、練馬区の防災学習センター長から、若い力で防災教育を

推進したいなどのお話をしていただきました。また、日本に１台しかない、水害体験車を取り入れての防災体験祭を行い、そこでは同好会の生徒も活躍しました。春日町の防災訓練にも参加しました。

私が当時、現役の都立高校の生徒だった頃の校長先生が現在、春日町町会で活躍されており、20数年ぶりの再会がありました。人と人とのつながりは素晴らしいと感じました。

ここからのお話は先方からいただいたものです。ねりま光が丘地域力活性化プロジェクト実行委員会は、練馬高校に着任してから、一番感動を受けた団体です。そこの実行委員の方が３名、本日この会場に出席してくださっています。実行委員長の大熊様との出会いは、一通の封書から始まりました。当時、東日本大震災があり、その状況でお祭りをするのはどうなのか、などの意見でお祭りが取りやめになってしまう地域もありました。光が丘団地が高齢化していたこともあったかと思いますが、老若男女関わらず地域力を高め活性化していきたい、という趣旨を伺って実際にお会いし、そこのお祭りに練馬高校の生徒が参加させていただきました。まさに地域密着型プロジェクトと思ってやっています。各種イベントには詳細に書かれた企画書があり、ご苦労もあったと思いますがイメージしやすく、分かりやすくまとまっています。それらを拝読いたしまして、地域を大切にしているところに非常に感銘を受けました。ぜひ、ねりま光が丘地域力活性化プロジェクトをインターネットで検索してみてください。二世代三世代を巻き込んでのお祭りであり、まさに多世代交流です。また、練馬区社会福祉協議会ボランティアセンターの方には、部活動でも授業でもご支援いただいており、文化祭や防災教育でも連携しています。

先の疑問に戻ります。連携とはなんでしょう。私は、直接会ってお話し、一緒に企画を実行することだと思います。電話では、とん挫してしまうことも多いのではないでしょうか。趣旨などを話し、互いに理解していくことが連携で大切なことではないかと思います。

３　教育活動のつながり

経済産業省では “前に踏み出す力”“考え抜く力”“チームで働く力”を“社会人基礎力”と定義しています。子どもたちが基礎学力をつけ、やがて専門知識が加わっていく中で、それらを活かしていく能力が“社会人基礎力”です。地域の特性を知る、コミュニケーション能力や思考力・判断能力の育成、未経験分野の経験などは授業で行えますが、生徒の「やってみたい」に応える、いかに吸い上げるかは、部活動でないと行えません。小地域福祉活動の発展のためには、老若男女を問わずいろいろと巻き込み、地域のお祭りなどイベントの企画には、その地域にある学校に声をかけることが大切です。地域と学校をつなぐためには、学校をもっと頼り、その際に外部の方がコーディネートすることは特に効果的です。

結論として、子どもたちを地域で育むためには、チームで行うことも大切ですが、交流していくことで、人が変わっていくことが大切だと思います。多世代交流の場をたくさんつくっていくことで、子どもたちは変わっていきます。そのためには、学校外に視点を置くことが大切です。みなさまの力が必要です。みんなで一つの方向に向かって、子どもたちを支援していくことが必要です。

質疑応答

Ｑ１：大山自治会では、自治会を拒否する人はいないのか？

（佐藤）入会することでメリットがいっぱいあるから 100%加入しています。生活保護受給者には、自治会費と管理費を納入してもらっています。

Ｑ２：行政と連携し名簿の活用をしたことあるか？

（佐藤）私たちも 24 時間対応しているので、役所にも 24 時間体制にしてもらいました。個人情報は漏らさないことで協定を結び、要支援名簿をいただいており、実際に相談も多くありま

す。

Q３：イベントへの参加や“人間と社会”の授業は誰が行うのか？

（正木）“人間と社会”の授業は各担任が行っています。イベントへの引率は、担当教員の中で割り振って行っています。

Q４：イベントを実施するのは一過性だが、その後のつながりをつくることについて、どのように考えているか？

（正木）やった後に振り返りを行い、次の活動に活かしています。生徒から新たにやりたいことが出された時には、普段連携しているところにお願いに行っています。

Q５：大学生との連携のきっかけは？

（佐藤）大学の“地域づくり”という授業で講義したことをきっかけに、実際の現場を見て、と視察を勧め多くの大学の体験学習を受け入れています。

Q６：社協はどんな存在か？

（佐藤）地域になくてはならない団体。被災者の受け入れ窓口であり、助成金やバックアップ体制で協力してもらっています。身近な仲間であり、親しみを持っていたりもします。今後も手を携え、連携していく大事なところです。

（市川）佐藤さんのような活動に対し、社協は協働して何ができるのか、社協自体が考え提案していく必要がありますね。

（正木）教員になる前からボランティアセンターと関わり、何かあった時には助けてくれる場所と思っていました。やりたいことがある団体はたくさんあるので、助成金などで支援してほしいです。

（市川）疲弊している現場もあるので、協働して何ができるか提案していきましょう。

Q７：継続していくうえで難しかったことは？

（佐藤）継続はとても大事。継続でいろいろな人材を発掘できます。いかに適材適所に振り分けていけるかが面白いです。またいろいろな企画を住民同士で受け入れていくことが大切です。アンケートで、自治会はなくて良いという人が10%いましたが、一人一人に理解してもらうためには長期にやらないといけないのではと思っています。楽しんでやったことが連携につながりました。

（正木）継続していくことが大事ですが、教員は異動があるので、継続できるか不安があります。

Q８：後継者は決まっているのか？

（佐藤）人を視るには５年かかりますが、引退するときには、次の人ときちんと人間関係を結んで引き継いでからと、後継者にも言っています。

（正木）ボランティア活動に理解してくれる先生はいますが、お願いしていくのは難しいようなので、この１年かけて考えていかなければならなりません。真の種まきは小学校の先生がやってくれていますが、発達段階に応じて、いかにインパクトを残し、その子どもたちに社会で活躍してもらえるようにするかが大切だと思っています。

まとめ

（佐藤）お金ももらわずに、毎日自転車で動いているのを見て、「自分たちも手伝おうよ」と声が広がっていきました。何事も、元気、陽気（明るく挨拶する、ありがとうと言う）、根気良くあきらめずにやること、行政には強気で言うこと。これで達成することができます。

（正木）中学時代、この数学の先生のようになりたいと思い、教員になりました。その前は家庭科の時に褒められたのをきっかけに、料理人になりたいと思いました。今、どこの学校でも、いろいろなことを抱えた子どもたちがいます。その子の視点に立ってどんなことができるかを、常に考えています。子どもたちを育てていく際に必要なのは福祉教育ではないでしょうか。江東区社協と、高校、大学からつながっていた道があったからこそ、そのように考えます。教育は共育、共に育つという視点でやっています。生徒ができないところは、自分がお手本を見せ、こうやっていくんだよと。ボランティア活動は生徒と同じ立場でやっており、全員に光

があたると良いと考えます。活動は一過性になってはいけないので、持ち帰り勉強して次に活かしていきたいと思います。

（市川）佐藤さんは、まずはやってみる、その評価は相手に委ねる、そして関心を抱いた方と一緒にやってみる。その繰り返しの中で実践してきたのだと思います。

自治体独自で取組めることは限られます。社協でできることも限られますので、協働ということになります。自助、公助の間に共助がありますが、社協はそれをどう担うか。協働は目には見えないので、具体的に議論して見えるようにしておかなければなりません。また地域診断は活動の原点です。地域にいる人（たとえば当事者、住民、ボランティア、専門職）や地域にあるもの（施設、サービス、住民関係）などを確認し、必要ならば掘り起こすという、1 か 100 かでなく、その間にいろいろな役割があります。自分のやることを明確にし、いつも振り返りを大切にして、次につなげていくというサイクルが大事です。